

# 鳥取大学公開授業講座「鳥取学～とっとり再発見～」

## 知事授業タイトル「とっとり新時代を拓く」

日 時：平成22年1月18日（月）

13:00～14:30（90分間）

場 所：鳥取大学 共通教育棟A20講義室

○平井知事 皆様、こんにちは。

きょうは鳥取大学の方でこういう鳥取学の講座に呼んでいただきました。本当に、皆さんには感謝を申し上げたいと思います。なかなか大学では発言の機会が就任以来なかったものですから、ようやくその機会をいただいたかなと考えております。

皆さんには、これまで鳥取学として今のお話ですと倉吉ですとか、いろんな地域の姿を聞いていただいたと思います。そして鳥取県の魅力について、またそのほかの悪いところといえますか、課題についても皆さんの方でいろいろと勉強もされてきているのではないかなと思います。私はちょっと毛色変わっているのかもしれませんが。

現在、行政をお預かりしている立場でございますが、鳥取県の知事をしております、平井と申します。私自身がこの道に入ったのはもともと地方行政の志からでありました。正直申し上げて、皆さんもこれからさまざまな将来の進路を頭の中に描いていると思います。ぜひぜひ、皆さんには皆さんの人生なりの挑戦をしていただきたいなと思うわけであります。私も就職をするときに、本当は別のことを考えていたのですけれども、たまさか公務員試験を受けたのですが、公務員試験というのは試験料がただなのですね。ですから、これを受けてみた。模試のつもりで受けましたら通ったということでございまして、通ると友達が何してるんだ、おまえもちょっとは官庁回りせよとか言われまして、回ってみたのですけれども、当時の大蔵省とか厚生労働省とか、それは踏ん返り返っているばかりで、霞ヶ関のあしき感じも感じなかったわけではありません。

そういう中で、地方行政には非常に興味を持ちました。やっぱり、現場に出て住民の皆さんと向き合ってどんな課題があるかということをも自分なりに聞いてみたかったですし、それからその土地で必要な仕事を精いっぱいやること、それに自分の人生をかけてもいいのかなと思いました。それで、今までこうして仕事をしてきて、今日に至るわけであります。

「とっとり新時代を拓く」ということで、きょうは講義をさせていただくことになりました。皆さんもニュースを毎日見ておられると思います。どんなことが今気になりますかね、気になるニュース。では、例えば多分政権のことなどあると思うのですね。政権交代がありました。政権交代についてどのように思うかなということ、いろんな議論がありますよね。私は、いいところもあれば、危なっかしいところもあるなと思っています。例えばきのう、おととい、その前といったあたり、もう全く民主党政権が揺れ動いています。小沢幹事長の資金の問題がありまして、私はああいう政治不信というものはまずは解消するのが政治の責任だろうと

思います。その辺の基本をやらなければいけないという気がいたしております。

ただ、今の民主党政権が目指しているところ、新政権が目指しているところは地域主権という言葉があります。地域が主人としての権能を持つ。地域主権という言葉がありまして、これをやろうというのを一番大切な政策だと訴えています。私はこのことは率直に評価をしています。ただ問題は、その内実をどうやってつくってくるかだと思います。

地方自治行政、自治体の行政で大切なことが幾つかあると思います。何が一番大切でしょうか。一番大切なのは恐らく、住民の皆さんの議論の中で、大衆討議の中で物事の結論を出していくということだと思います。町内会がそうですよね。町内会に出てみますと、そこにいろんなおじさん、おばさんたちがいまして、そのおじさん、おばさんたちで話し合っでは、ことしの町内はこうしましょうという話をしていく。鳥取県の県政もそうでありまして、毎年毎年、あるいは毎日毎日、いろんな人の意見が寄せられます。それを受けとめてどうやってこれからの行政を進めていくのか。それを正直に考えていくのが本来だと思います。

しかし、これまで長い間お上意識がすごく強かったと思うのです。江戸時代とか、今も坂本竜馬という龍馬伝が始まっています。あれを見ていただくともものすごい身分制社会でありますけれども、坂本竜馬などの下士、郷土の世界だと。身分の低い侍だということで虐げられているわけでありまして、ものを言うにも言えない、そういう気風が長いこと残っていたように思うのです。でも、この10年ぐらいで大分変わりました。片山さんが、私の前任として知事になられて、この鳥取大学でも講義を持たれたりされているわけでありまして、そういうことで一つは県庁をオープンにしようということをやってきたわけでありまして。

鳥取県もそれをやってきて、もう10年ぐらいになります。平成11年にそういう取り組みを始めました。今21年度でありますので、大体10年ぐらいたったわけでありまして。それで解決したかという、解決していないと私は思います。残念ながら片山さんは解決まで至らなかった。確かに情報公開は一定程度進みました。しかし、片山さんが辞められる直前に大分内向きになったのです。私もその後就任してみてもびっくりしましたけれども、県庁の中でいろいろと墨消しをしまして情報公開をするというのが当たり前のようになっていた。私がまた、もう一回もとに戻そうとしたのが駆け出しのころでありました。

では、情報公開がされたから全部解決するかというと、そういうわけではないのです。本当に大切なのは、その後です。情報公開をした後に、例えば市町村だとか、あるいはいろんな産業を担っている農業者とか商工業者だとか、あるいは学生さんだとか、そういう人たちと色々な議論をしたり認識を共有しながら、みんなの力で意思決定をして決まったからには、よしやろうとやっていくスタイルが必要なわけでありまして。これが、地方自治のいいところなのですね。

それができたかということ、残念ながら片山さんの8年間ではできなかったと、私は率直に思います。だから、この難しい課題をもう一回やらなければならない。最後のころ、片山さんは自立ということをおっしゃいました。確かに自立ということによってみんなそれぞれにやって

いこうということで意識改革はできたかもしれませんが。しかし、市町村は自立ですよ、農業者は自立ですよ、商工業者は自立ですよ、大学は自立ですよと全部自立だと。それに対する県政のサポートは要らないというロジックにすりかわってしまったのです。私はこれではいけないと思いました。ですから私が就任して以来、何を訴えたかといいますと、自立だけではなくて連携だと。みんなが手をつないで、この狭い鳥取県という世界、たかだか59万人の地域社会でありますので、そこでやるべきことをみんなで課題を考えてやっていこうではないか、そういうように改めようという話をいたしたわけであります。

実は世界じゅうに、そういう動きがあります。例えばEUというヨーロッパ共同体があります。EUの中で出ているいろんな議論がございますけれども、あれは国を絶たれるだけではないのですね。1985年にヨーロッパ地方自治憲章というものが制定されました。それは、EUは国のまとまりでありますけれども、国がまとまって政治が大きくなるからこそ地方、地域に密着した行政をどういうスタイルでつくっていくかが大切だ。ですから、大きな国をまとめるぐらいの器を用意するのとあわせて、地方自治というものに対する制度保障をしようということをして1985年に考えたのです。この調印はどんどん世界に広まりました。その地方自治憲章の中に書いてあったこと。第4条で書いてありましたのは、補充性の原則というのですね。プリンシプル・オブ・サブシディリアリティーという原則なのですが、サブシディリアリティーというのは、補充をするということですね。その原則、プリンシプル・オブ・サブシディリアリティー。こういうような目標を立てました。すなわち、できるだけ身近なことは身近な行政で済ませるように制度設計をしましょうということ。あわせて、同じ地方自治憲章の中で、地方財政についての制度的な保障も入れたのです。

今、日本もこれに差しかわろうとしていまして、新政権、民主党を中心とした政権が現在、これに取り組もうとしています。この中で、地域主権戦略会議というのをつくりまして、こうした地方自治制度の改革をもう一度やろうと言っております。私はこれはいいことだと思いますので、鳥取県でも地域主権の研究会をつくりました。神野先生という、今度税調の委員にもなられましたけれども、もともと東京大学経済学部の学部長をされたりした先生であります。この方にトップになっていただきまして、今そういう検討をしています。これから、恐らく地方制度は変わってきます。皆さんがこの大学を巣立たれる時代には、今やろうとしていることがうまくいけば、もっともっと皆さんの力で世の中を変えやすいようになると思います。そのときに皆さん、ぜひいろんなチャレンジをしてほしいと思います。

きょうは鳥取に焦点を絞って考えることにいたしました。それはこの鳥取県からいろんな挑戦をしていこうということです。単に自立ということで、自分だけがいいということではなくて、県庁だけがいい、県庁至上主義ということではなくて、本当の地域の課題の中でこれから伸びていく方向性はどんなところにあるか、皆さんと一緒にざっと見てみたいと思います。それをヒントにさせていただいて、これからも鳥取県での学生生活、さらには皆さんがここをそれぞれ巣立った後、いろんな世界へ出ていかれるでしょう。そのときに地域社会の中で何をすべきか、それを見るきっかけになってほしいなと思います。

鳥取にはいろんな指標があると思いますが、まず皆さんの頭に思い浮かぶのは、全国で一番小さな自治体だということ。わずか59万1,150人ということでございまして、少ない方から数えて一番目ということでもあります。ただ、小さいから、それは力がないかというともう一つの指標があります。ボランティアの参加率、これに注目をしていただきたいと思っています。34.4%ということでありまして、全国は26%ですけれども、全国で堂々の第1位なのです。これは、1年間に何らかのボランティア活動にかかわった人の割合を示したものであります。全国第2位はどこだと思いますか。皆さんも想像がつくかと思いますが、全国第2位は島根県です。やっぱりそうかなと思うのです。山陰にはそういう人の結びつきというものがまだ生きているのです。惣事(そうごと)という言葉がこの地方ではあります。村のみんなが生まれて、それでどぶさらいをするとか、そういう惣事。歴史で習ったかもしれませんが、「物」と書いて「心」と書くのです。ああいう伝統というものが今でも残っている。それが別の環境のボランティアなどにつながっているのです。

身近なところで考えていただきますと、例えばカレー王国だと、カレールウが1世帯1年で一番。インスタントラーメン、これも一番。この辺を考えてみますと、ちょっと貧しい感じがいたしますけれども、カレーのルウとかインスタントラーメンばかりこの地方は食っているのかなと思われるかもしれませんが、この裏が実はあるのだと思います。私が推測するに、雇用形態だとかいろいろあると思うのです。ちくわ、これはとうふちくわというジャンルもありますので、このとうふちくわも含めてということではありますが年間の消費量が一番。ナシの消費量が一番、この辺もそうかなということだと思います。

左下の方ごらんいただきますと、軽自動車の普及率も96両でありまして、これも全国1位だと。この指標のつくり方を見ていただきますと、100世帯当たり96両ですからね。1家に1台軽自動車、とんでもなく多いなと思われると思います。これは、結局鳥取県の場合は、結構共働き率が高いのです。女性も社会進出が結構進んでいまして、一緒になって働くということがあります。2台目、3台目ということもありまして、こういう軽自動車が普及をする。もちろん、値段のこともありますよね。環境のこともあるでしょう。さっきのカレーだとか、インスタントラーメンというのも、恐らくそういうところが若干の影響があると思います。手軽につくれる食材というものが重宝されている。そんなこともあるのではないのでしょうか。

では、過ぎしにいくかという左上の方ごらんいただきますと、保育所などの児童福祉施設の数を見ていただきますと、これは全国1位です。人口10万人当たり4.30ということでありまして、子育てをするのだったら鳥取はいいところだと。右の体育館もそうです。それから、都道府県立の図書館の資料などもそうです。皆さん、もしメモをとるのが忙しければ、この資料を公開しますので、また教務さんの方に残しておきますから、後ほどまたゆっくりごらんいただいても結構かと思います。

それから、鳥取の歴史とか文化遺産でありますけれども、この辺は習ったかもしれませんが、弥生時代、この辺は1つ、2つ、3つと幾つか王国があったと思われれます。特に大陸との関

係が強かったと思われます。弥生時代、西の方、妻木晩田遺跡というのがあります。230ヘクタールということでございまして、佐賀の吉野ヶ里遺跡よりもでっかいのですね。行ってごらんになるとよくおわかりになると思います。歩いて回ると切りがありません。そして、そこに年代を越えて人が住み続けたのです。これは複合遺跡でありまして、弥生のころから、それから古墳時代に至るまで住み続けるわけであります。そうして時代を経ていきますと、左下の方、白鳳時代にはこういう壁画があったわけでありまして、これは淀江の方で出土したわけであります。上淀廃寺というお寺のものであります。右の方をごらんになりますと、平安時代、国宝投入堂というのが、大体11世紀というふうに年輪年代測定法で算定されておる、そういう古い時代に建てられた日本最古の神殿用の建築だと言われている。

特に注目されるのは、こうしたいろいろな時代のものがあるわけでありまして、弥生とか太古のころ、交流が盛んだった大陸の息吹を感じることであります。とっとりの弥生の王国に見る対外交流ということで、図にしてみました。出土したものは、上の方にありますように四隅突出型古墳というのがございまして、4つの隅がこたつようになって、隅が4つ出ています。そこは行っていただくとわかるのですが、そこから祭壇の上のようなところに上がるそんな構造かなと思われるようなところもあります。これは山陰特有のものではあるのですが、ほかの地方にも伝播したたぐいがあります。また、妻木晩田遺跡などの、ちょっと下の方の四国あたりにかいた格好になっていますが、吉備のあたりの特徴あるこういう器が出土をしていたり、それから大陸の方からやってきたと思われる貨泉とか、それから骨で占うようなもの、卜骨占い、シカの骨などを焼いてみてその割れ方で占いをしたと。こういうものが青谷上寺地遺跡だとか妻木晩田遺跡から出てきている。そういうことから考えますと、かつては大陸と交流があったわけでありまして、今はそんなに盛んではないのですけれども。

そうやって考えてみますと、これからの鳥取県の方向性で一つ大切なのは、もう一度アジアに目を向けてみるかなと私は思っています。北東アジアゲートウェイ構想ということも申し上げているわけでありまして。

鳩山総理が就任をして早々に、東アジア共同体ということをおっしゃいました。この東アジア共同体では、各国が恐らく分業することになると思います。中国は中国の得意なことをやり、韓国は韓国の得意なことをやり、極東ロシア、それから東南アジアにかけてのあたり、そういう区域でそれぞれの地域が結びつき合いながら経済的な発展を遂げていくことになるのではないのでしょうか。

このたび、GDPの発表もなされるわけでありまして、中国がとうとう日本を抜いて世界第2位のGDP大国に成長することになります。自動車の販売台数は、今までアメリカがトップなのは常識でありました、とうとう中国がトップになる。そういうように変わってきているわけです。

経済の中心地はヨーロッパからアメリカに移りました。そして、パクスブリタニカと言われた時代からパクスアメリカと言われるような時代になり、そしてパクスジャポニカと言われる時代になり、日本が中心になりかけたのですが、日本だけではなくて、むしろ中国だとか、

そういうパクスアジアとでも言うべきアジアの支配が始まろうとしているのだと思うのです。そういう時代が移り変わる中で考えれば、鳥取とか山陰というのは、場所として悪くないですね。地図をよくごらんください。日本の中心はどこか。これは言わずもがなであります。東京です。これで東京はちょっと隠れてしまっていますが左上の方ですよね。それから、大阪などの関西圏が中心だと言われていています。それから、東海地方などもトヨタなどで隆盛をきわめているようであります。

しかし、アジアの中での日本の位置づけを見た場合に、東京というのはものすごく遠いのです、アジアの各国と結ぼうと思いますと。大阪、あるいは名古屋から考えますと、山陰というのは実は近いのです。地図をよくごらんいただきますと、手を差し伸べたかのように中国地方がある。こういう形をしている。手を差し伸べた中国地方のその腕のところに鳥取県があるわけであります。こういうことで考えてみれば、今までは日本海側ではなくて太平洋側が表日本という言い方すらしていました。しかし、これが妥当しない時代がやってきているということですよ。

なぜ、表日本だったかということ、ペリー来航が浦賀とか、それから江戸湾の方にやってきました。アメリカ、ヨーロッパ世界からいいますと太平洋からやってくるわけでありまして、そうすると江戸湾などが近い位置にあるかもしれません。しかし、今、もしアジアの方が中心ということになると、その時代、昔を思い起こしていただければと思いますが、中国では王朝が栄え続けたわけであります。そして、その影響下で朝鮮半島でも文化が栄えていた。その時代に近いような形に今なりかけているのです。世界の中心がこのアジアの方に集まってきている。集中がこちらの方に起こってきていることを考えれば、人口集中に加えて、経済成長が重なり合ってくるということを考えれば、むしろこうしたアジアに近い地域に発展の可能性、ポテンシャルがあることを容易にこの地図から読み取れるだろうと思います。

なぜ日本海側が裏日本と言われるような状況になったかということ、実は政治がつくり出したものだと考えられます。江戸時代を思い浮かべてください。江戸時代は、この鳥取は三十二万石の藩でありました。全国で約300の藩があったのです。分権国家と言え、分権国家だったのかもしれませんが。集権的なところは幕藩体制でもありまして、それが担っていた。ただ、競争的にそれぞれの地域がやっていたのです。富の源泉はどこにあったか、それはわかりでしょうか。江戸時代、富の源泉は米にあったのです。石高でその富をあらわしますよね。その石高が上がる稲作ということを考えてみれば、今日本で稲作が一番盛んなのはどの辺ですか。北陸地方とか東北とか、そういうところですよ。それから、この山陰地方もやっぱり今でもおいしいお米がとれるわけであります。北前船という船がなぜ、回遊する必要があったか。それはこちら側に富の源泉であるお米があったからなのですよ。ですから、実は豊かなのは日本海側の方だったのです。

そういうことありますので、統計をとってみますと、明治10年ごろの統計が幾つか残っているのですが、明治10年ごろ、当時は富国強兵を考えたわけです。そして群馬県に、富岡製糸工場などをつくりまして、官営工場などをやる。そうして富国強兵を進めるというこ

とになります。要は糸、繊維製品のもととなる綿作が一番全国で盛んだったのは鳥取県の会見郡であります。明治10年の統計です。そして、明治9年に人口統計をとっているのですけれども、鳥取市というのは全国有数の都市だったのです。ところが、その後あつという間に形勢が変わってくるのです。それは、結局この地方で上がった富を吸い上げて、それを太平洋側の方に資本投下していった歴史が続いたのです。現に、明治11年の統計をとってみますと、このときは島根県、鳥取県は合併して山陰県とでも言うべき大島根県の時代でした。このときの地租、すなわち税金の税収高というのは全国で7位ですから。それほどまでにこの辺は富が集中していたわけでありまして。ところが、そういうところでできた税金を太平洋ベルト地帯の方に出していったと。例えば、東海道線ができて随分時間がたってから、今から100年前に山陰本線が通ずるといふことでもありますから、それほど、いろんなことで資本投下がおくられてきて、地域間格差が広がってきた。その歴史だったわけでありまして。

今、これからはもう一度、ひっくり返していく必要があるのではないかと。これは、日本のためでもあるし、アジアのためでもあるわけでありまして。鳥取県ですと、境港から東海やウラジオストクに行く船を出したり、米子-ソウル便という航空路を何とか存続させようと頑張っているわけでありまして。新しい航路はここに書かれているわけでありまして、DBSクルーズフェリーという航路であります。昨年の6月末に初めて境港に姿をあらわしました。7月から定期就航をするようになっています。境港から東海、そしてウラジオストクを結ぶわけでありまして。これは、韓国の会社が探したのです。どこに船を走らせようか。それでいろいろと港を見て歩いたようでありまして。その上で、境港がいいということになったという話でありました。なぜかという、近かったからです。簡単なことですよ。12時間で行けるわけ。東海というのは朝鮮半島の東側の方なのです。東海のすぐ近くに竜平リゾートというところがございます。ロシアのソチでバンクーバーの次のオリンピックが開かれますが、そのオリンピックの候補地を争ったところがこの東海のすぐ近くの山です。実は16日から東海のすぐ近くの大関嶺という場所で札幌みたいに雪祭りやっているものですから、コナンの雪像を建てまして、今それをやっているところでありまして。そうした朝鮮半島の真ん中辺に近いポジションであります。ここからソウルまでは車で、高速道路で3時間、4時間ぐらいで行くポジションなのです。

今、世界の港の中心は釜山の方に行っているのですが、釜山は朝鮮半島の一番南のところ。ソウルまで結構時間がかかります。ですから、ソウルに持って行くには時間、距離は近いことになる。さらにウラジオストクというところも、ロシアを望むわけでございまして、こちらの方にも行くわけでありまして。

この航路は貨客船であります。今まで、長いこと日本海沿岸の地域はこうした航路の開設を望んでいました。これからは、日本海を挟んで行き来をするようにしなければいけない。大陸のみではなくて、交流の海に変えていかなければならないと、みんなが考えていたのです。ただ、なかなかそれが実現できなかった。そして、ようやく実現したのがこれでありまして。

これを使いますと、例えばヨーロッパの方に物を輸出しようと考えた場合に、今ですと、ずっ

と南の方を回っていくのです。シンガポールの方を通過して、それからスエズ運河を通過して、だから海賊に襲われたという話がありますよね。そしてヨーロッパの方へ回り込んでいくわけでありまして。ざっと40日ぐらいかかる。しかし、真っすぐウラジオストクの方に走りますと、この船が着く場所はウラジオストクの駅の場所でもあります。そこから、大陸横断のシベリア鉄道が走っています。それでモスクワの方に運ぶことができる。ですから、40日かかるところが2週間ぐらいで運べるようになるのです。そのように、革命的に時間短縮にもなる可能性があります。

ですから、こうしたものを起爆剤にしていくことができれば、今までは日本海側というのは裏のように思われていましたけれども表だと。表玄関だと。ここから、いろんなところに行く。いろんなところに運ぶのだ。ですから、ここに産業の集積が起こる可能性が新しく出てくるし、それから観光客が海外からやってくる可能性が出てくるということでもあります。

現に外国人の観光客は急増したわけでありまして。これは1月4日までの数字であります。何と乗客数が2万人を突破しました。韓国の方が1万4,000人ぐらいで一番多くて、その次に日本、ロシアというところがつながります。その他176というのは何だろうかと思われるかもしれませんが。実はロシアからも来るわけでありまして、ロシアから来る方の中で、船が上がったところで聞いてみますと、フランスから来ましたというわけですね。要はシベリア鉄道でずうっとやってきて、そこから船で渡っていると。本当にそうやって旅をする人が出てきているわけでありまして。右上にあります。ロシアのフリガト・アエロという会社がございます。ウラジオストクでも有数の旅行会社であります。鳥取県の境港に支店を開設することになりました。鳥取県の一畑トラベルという会社と提携をし、泊まり場所としても皆生ホテルという米子市のホテルと契約をしまして、それで向こうからのお客様を迎え入れようということになり始めました。

最初に就航したころ多かったのは、左下の方であります。行列をつくって境港を通過するのにC I Q、入国審査で2時間待ちとかいうことに残念ながらなってしまうぐらいお客様が殺到しました。登山客が多かったですね。大山登山。今、韓国ではこうしたトレッキングがはやっているようでございまして、その勢いで大山の方に求めたわけでありまして。韓国の名山はどこかと言いますと、雪岳山という山です。この雪岳山は、1708メートルの山なのであります。日本でいうと、富士山に登るようなつもりで雪岳山に登るわけですね。鳥取県の大山、高さ1709メートルであります。1メートルこちらが勝っているのですが、大体同じようなところに上られるものなので、しかも港からすぐ近くでありますので、元気なツアーでしたけれども、日帰りですと、日本国内ですね、そういうツアーもできました。

物流も今、拡大しようとして頑張っているのですが、これなかなか苦戦もあります。境港の方に来る貨物量など、取扱貨物量が右の真ん中辺にありますけれども、1月4日までで100TEU、TEUというのはコンテナの単位ですが、要は100単位を超えるようなコンテナ扱いにもなっているわけでありまして。ただ、韓国からロシア向けが多くて、韓国と日本との間でいいますとまだまだ課題が多いだらうと思っています。



ただ、私は、ここで発想の転換をしなければいけないと思います。これからは、アジアとくっついていくことを企業さんは重視するでしょう。我々も現にいろんな会社にはアタックをしています。これまでだと、例えばわざわざ下関まで持って行って、釜山へ持っていった。そうでなくて、近いところで境港から東海へ運んだらどうだろうか。それから陸送ということも考えてやっていきますと、環境対策の面もあるだろう。ロシアの方も、おもしろい手だてがいろいろとあると思います。

滑走路も米子空港2, 500メートルに延長をしました。この2, 500メートル化が12月17日にでき上がったわけでありましてけれども、これでどういうことが変わってくるか。1つは遠くまで行けるということです。燃料をいっぱい積んで飛び立とうと思うと重たいですから、それだけ長いこと走らなければいけないのですね。その上で、おもむろに飛び上がるということでもありますので、滑走路は長くないといけません。そうして初めて飛べるようになったのが、例えばハワイであります。こういうハワイだとか、オーストラリアだとか、アメリカの西海岸だとか、ヨーロッパだとか、そうしたところが直接飛べる範囲に米子が入ってきたということですね。鳥取県の米子の飛行場があります。それを記念しまして、12月19日に初めてハワイ行きの飛行機を飛ばしました。満席で飛んでいきました。今度は、マカオだとか、あるいはベトナム方面だとか、そういう計画も今あるようでありましてけれども、そのように世界とつながっていく資格を得ることができたと思っています。また、大型の機材も投入できる状況になりました。ボーイング777とか、ああいうものも投入できるわけがあります。

あと、うれしいのは滑走路が冬の間でも使いやすくなることでもあります。実は正月一日は、皇居の方で新年祝賀の儀という天皇皇后両陛下、皇族方がお出ましになりまして、ごあいさつをする儀式があるのですが、私はそれに参加しようと思ったのです。正月一日に飛ぼうと思いましたが、残念ながらどうも大みそかぐらいから雲行きがおかしいと。雪が降ってしまっていて、欠航が出るのではないかと。案の定、12月31日には鳥取空港は欠航が生まれて、それで慌てて大阪の伊丹まで行って、それで羽田へ飛んで行って何とか間に合ったわけでありましてけれども、同じように行くはずだった富山の知事さんは、富山県の空港が2, 000メートル滑走路でやっぱり飛べなくて、当日急遽欠席をされました。

ただ、2, 500メートルになりますと、変わってくるのです。すなわち制動距離、運転免許を持った方はおわかりだと思いますけれども、雨の日の運転、雪の日の運転と習いましたよね。晴れの日だったら25メートルでとまるところが、雨の日だと、何十メートルかふえる、そういう考え方があります。雪が降っていて多少路面の状況が悪くても、おりられる距離というのは延びるわけです。延びてくれればおりられるようになる。現に、このお正月も米子空港は1便も欠航しませんでした。雪は降っていましたが、それぐらい冬期間の運行にはいい影響があるということでありました。

東アジアの時代を見詰めようということで、沿海地方のロシア、それから吉林省だとか、中国の東北地方ですね、それから韓国の江原道という、さっきの東海という港があるところ、

あわせてモンゴルの中央県、これは大相撲の白鵬関のふるさとでございますが、そういうところと交流をして、ダイヤモンド・クインテット経済共栄圏というふうには呼ばせていただいたのですが、この5つの地域でダイヤモンドのようにきつく、かたく結び合って、これからのアジアを変えていこうではないか、交流の時代を聞いていこうではないかという取り組みを始めました。

さらに、この交流は海外だけではありません。国内でも鳥取県というのは、今まで孤立がちだったのです。特に、皆さんが今ここで講義を受けておられます鳥取市であります。鳥取市は日本で唯一県庁所在地であって、高速道路が通ってないところでした。ようやく、この3月末になりますけれども、この鳥取市の中心部のところのあたりまで高速道路がやってくるようになります。この鳥取自動車道が右側の方にありますが、河原インターから西粟倉インターがつながったわけでありまして、ことしの3月末ぐらい、今年度末のあたりで鳥取のインターチェンジまでつながることになりました。

また、下の方ですね。地図の南の方を見ていただきますと、佐用ジャンクションというところから、大原まで、宮本武蔵のふるさとと言われていたのですが、これも3月に開通をすると言われております。ですから、あとは大原、西粟倉という平成24年度供用と書いてありますが、この区間を除いて、この区間約8キロありますけれども、それ以外は全部開通するということなのです。この佐用から鳥取のインターチェンジまで、鳥取自動車道は全部無料で通れるようにつくっています。この辺は、ほかのところと違った高速道路であります。実は、道路公団の問題があったときにこの高速道路をこれからどうやってつくろうかというとき、私たち鳥取県は岡山県、兵庫県と共同しまして、無料で供用することを条件として県もお金を出しますと、そういう地元も負担するタイプの高速道路でつくったのです。ですから、ここはほかにはないユニークな高速道路、無料の高速道路になります。

さらに県の東西を結ぶ鳥取から西の方ですね、米子のキャンパスの方へと向かっていく山陰自動車道。これも今、開通を目指して工事をしています。来年度いっぱい、東伯、赤碕中山の間が開通することになります。そのほかのところも、今新政権で結構この道路の見直しがきつくて、私も往生しています。先般も前原大臣にお会いに行きました。そして地元で、いろいろと発掘調査をしなければいけないとか、そういうのが高速道路に必要なだとか、そんな話も申し上げながら事業費の必要性を説いてまいってきたのですが、そういうことで何とかこれは努力していかなければならない。さらに、兵庫県側の方も結んでいく道路が建設中であります。

特にこの鳥取自動車道がもうすぐ開通をします。これは恐らく鳥取県に対してすごくドラマチックな変化を呼び起こすと思います。今までにはなかったものができます。物流の可能性や観光の可能性が一気に広がります。ほっておきますと、ストロー効果と言われてますが、全部関西圏だとか山陽方面に吸収されかねない。だから逆に、こちらの方へ観光客に来てもらうようにするとか、それからこちらが発でさまざまな物流を起こしていくとか、そういう努力が今こそ求められているわけでありまして。

大体、大阪まで、今まで3時間20分かかっていたものが、今年度末で2時間40分まで短縮をされます。本当に近くなります。こうしたことをにらんで考えれば他県との連携も大切です。先ほども申しましたが、鳥取県も一時期モンロー主義のようになっていまして、県庁至上主義、鳥取県絶対主義で、周りの都道府県との交流が閉ざされかけた状況がありました。私は就任してそれをひっくり返しにかかりました。鳥根県との交流だとか、岡山。それから、近畿圏との交流を盛んにしようということでやってきました。

12月19日には、隣の鳥根県の溝口知事と握手した写真がありますが、これはもう昔からの課題です。昭和50年代に入りまして、鳥根県で昭和47年の大洪水などがあったわけでありまして、それを解消しよう。両県にまたがる水域ですね。地図をごらんいただきます。中海というのが読めると思います。宍道湖から下流になるのですね、これがつながって一つの川なのです。中海からさらに、川と言うべき境水道で下って日本海に出る。こういう一連の川がありまして、水源は鳥取、鳥根両県の県境のあたりなのですね。日野郡の方にありますけれども、そこからぐるぐる回る斐伊川水系がございます。この水系の治水対策を両県で対立してきた歴史がありました。

そうではなくて、問題を切りかえようと。松江市の方でも、平成18年にさらなる洪水もありました。ですから、鳥取県の下流側の堤防高をきちんと確保してもらおうとか、そういう条件を組んだり、また前任の片山知事の中には、大海崎堤という堤防を開削しないということで決着をしていたのですが、世論はそうではありませんでした。ですから、大海崎堤の開削の可能性も視野に入れて、これから治水対策、環境対策を検討しよう、こういう条件で鳥根県側に提示しました。鳥根県側はこれを丸のみしていただきまして、ここに歴史的な合意ができるに至ったわけでありまして。

これからは、さらに両県一体となってやっていくことがふえてくると思います。例えば、山陰文化観光圏といわれる取り組みでありまして、観光のことを考えますと、鳥根県も鳥取県も別に境目がないのです。旅人には県境は見えないわけでありまして、境港は妖怪のふるさとであります。ここは鳥取県です。そして松江の松江城、それから出雲大社、そういうところは鳥根県。だから境港だけでお客さんが帰るかといったらそんなわけではないわけでありまして、境港をごらんになる方というのは大抵松江城にも行かれるわけですね。足立美術館にも行く。それから鳥取県側の大山とか、皆生温泉。さらに言えば、中部の三朝温泉といったところも旅人が動き回る、そういうエリアになってくるわけでありまして。ですから、県境というものを取っ払って山陰文化観光圏という新しい観光エリアをつくらうではありませんか。これが、今私たちが目指しているところであります。

それから、関西との連携というのも一つの大きなテーマになると思います。実は、一昨年、平成20年の6月に近畿ブロック知事会議に私も加入をいたしました。これは、今までも何度か、鳥取県はこの近畿知事会へ加入しよう、アタックをした時期はあるのですが、いずれも断られたのです。私が就任して、最初一つここに焦点を当てまして、鳥取自動車道が平成21年度末にほぼ開通すると。そういうことで、関西との結びつきがますます強まるであろうと。

それをにらんでいけば経済とか観光面での一体性というのを視野に入れなければならない。そういうことで関西との連携を考えよう。近畿知事会への加入をということで考えたわけがあります。

折しも、大阪の知事さんとお会いしまして、さらに兵庫とか京都の知事さんにも非常に親しくしていただいていたものですから、入ったらいいのではないかとおっしゃったので、それでは、入りますよと言って入ったという次第です。

実は、大阪は前は女性の知事さんでして、非常にお酒が好きでございまして、太田房江さんという知事さんなのですが。夜、知事会のお酒を部屋で飲んでいるところに、我々は若者組の知事でありまして、引っ張り込まれて、お酌せよという感じなのですけれども。何のために選挙に当選して知事になったかなと思うぐらいでありまして、水割りをつくらされたりしたのですが。そのときに、ああ、平井さん、あんたかわいいわねとおっしゃりまして、まあまあ、来て座りなさいよとか言って。中国の知事会もいけれども、あそこちょっと雰囲気暗くないとか言われて、関西へいらっしゃいとか言われて、実は入ろうと思ったのです、本当に入っていいのですかと言ったら、いいですよと言って。ほかの京都とか兵庫の知事さんも同席されていたものですから、いいですね、いいですねとそこで了解をとってしまって、それで入ったというのが本当のところなのですけれども。

昨年の6月には左下にありますがけれども、関西の近畿ブロック知事会を鳥取市で初めて開きました。青谷で開いたのですけれども、写真は砂像フェスティバルです。大阪の橋下知事も来られて、この砂像フェスティバルの終わった次の日でした。これは壊す直前なのですね、この写真は。ですから、大阪の橋下知事は、この砂像に霞ヶ関と書いてみんなで壊そうとかですね、何か子供みたいなこと言っていましたが、そういうことでやったわけがあります。

関西との広域連携、例えば救急医療の関係でドクターヘリ、これは兵庫県の北部の方とか、京都の北部の方と同じヘリで運用するという手があるのではないかと、こんな話し合いをしています。観光とか文化関係でも、山陰海岸ジオパークもございまして、連携してみてもどうだろうか。それから、防災もそうあります。このたびハイチでの地震がありました。鳥取県も今から10年前、平成12年の10月6日午後1時半に鳥取県西部地震がありました。マグニチュード7.3で、阪神大震災を上回る、阪神大震災は7.2でありますから、結構大きな地震でした。そのような経験もあります。ですから、関西圏でそういう連携をしながら、防災対策を組んでいこうということです。

観光で見ていただければ、例えばこういうようなルートがいろいろ組めるだろうなということですね。水木しげるロードを見たり、温泉へ入ったり、倉吉の土蔵群を見たりして、姫路城に行って神戸を通過してユニバーサルスタジオとかですね。こういうのはうそみたいなと思われるかもしれませんが、実現可能なのです。

先般、韓国の旅行会社の人と話をしたのです。今、中国人の旅行客というのが大変なブームになっています。その中国人の旅行客に韓国に来ていただいて、日本の米子空港を通して

日本の周遊をしてもらおうかという話をしたのです。それはぜひやろうと言っているのです。というのも、中国人の場合は10日間ぐらい旅をするのです。要は、ずっと動きながら旅をするのです。せっかく行くのだからいろんなところを見て回ろうと。だから、関西圏と連携してこういう広域的な旅を組んでも、これは実は旅のニーズにマッチするという可能性があるのです。

それから、山陰海岸のジオパークであります。きょうも、ジオパークのシンポジウムをこの後やることにしているのですが、いよいよこの5月から外国の調査団がやってきます。山陰海岸ジオパークの世界ネットワーク加盟を目指そうということでもあります。この区間は、これも西田先生の方から事細かに話があったと思いますが、日本海でつながっていったような時代の記憶があります。この近くの鳥取砂丘も10万年の歴史を刻んでいるわけです。その鳥取砂丘などから少し話を転じていきたいと思いますが、これからのテーマ、1つは今申し上げたように大交流時代。特にアジアと結びつく。各地と結びついて、鳥取を自立して連携をする地域に変えていこうというのが一つのテーマだと思います。もう一つのテーマとして大きいと思いますのは、環境とかそういう視点を考えていくことでもあります。

日本一の鳥取砂丘を守り育てる条例というのを、鳥取県は制定しました。きっかけになりましたのは、1つの事件でありました。砂丘の馬の背と言われる斜面のところにHUCKと書いた落書きがあったのです。これは何だといって大分問題になりまして、テレビや新聞でも騒がれました。これはいかんということで、皆さん大分怒ったのです。結局、愛知県の学生さんのいたずらだったわけでありまして、そういうことでこの砂丘を守っていくべきだという意識が生まれかけたと思うのです。

私がかねてから、これまでとは違った観光のあり方だとか、地域づくりのあり方があるだろうと思っていました。それは今までは、来ていただく観光客だとか人々というのはお客さんであって、お客さんの機嫌を損ねてはいけません。しかし、これからはこの環境を一緒にみんなで守ろうではないですか。これだけすばらしいものだから、皆さんも来るからにはこういう決まりは守ってください、そう訴えた方がかえっていいのではないかと。

例えば、群馬、福島の間境のあたり、尾瀬というところがあります。その尾瀬であれば、ごみを捨ててはいけなとかいろんなルールがあるわけです。だからこそ自然が守られていて、そこに多くの観光客が引きつけられるようにやってくる。同じことは、鳥取砂丘にもあって当然だと思います。

私は、知事になる前にアメリカの方にいまして、ニューヨーク・タイムズをふとあけてびっくりしたことがありました。砂丘の記事だったのです。その砂丘の記事で、何と書いてあったかといいますと、タイトルが忍び寄る緑に対する防衛というようなタイトルでございまして、普通であれば世界じゅう、どこでもこういう砂漠だとか乾燥地的なところは緑化をするけれども、世界じゅうでただ一つここは雑草を抜く、除草作業をして、むしろ緑化の反対をやっている珍しいところだというそんな記事なのです。多分、半分は興味本位で来られたのでしょうけれども、来られたニューヨーク・タイムズの記者さんは、それにむしろ感動されて記事

にされたようであります。

もともとは、その記者さんは中東の方におられた記者さんが転勤で日本にやってきて、そげな変なところがあるのかなと思って行ったというのが本当みたいですけれども、ただ、来てみるとみんな大まじめで砂丘の緑化を防ごうとしている。

実際に草原化が激しかったのは平成2年、3年といったころでありまして、平成に入って進んできた。しかし、今では当時の3割ぐらいまでその緑化といいますか、緑は防がれてきております。そういうように砂丘を保全する取り組みをしたり、行為規制ですね。例えばロケット花火はやめてください、落書きはやめてください、ごみのポイ捨てだとか、動物のふんだとか、それから中にはマナーの悪い人があそこでゴルフの練習をしてサンドの練習をしているのです。そんなこともやめてくれとか、こういうことが書いてあります。

砂丘の利用者であっても、すなわち砂丘を見に来る人であってもこういうルールを守ってくだいねというのを書いてあるのが、この条例のおもしろいところでもあります。それで、実際にレンジャーを雇って、今ではやっています。下の方に鳥取砂丘除草ボランティア、現在ではもう3,000人をはるかに超えて、今年度は3,600人ぐらいになっています。皆さんもぜひ、機会があればまた来年、再来年と参加をしていただければと思います。

上の方は同じような活動で、これも全国であつと驚くようなものでありますが、先般、天皇陛下に地方事情のゴシンコウを申し上げたときにこの話申し上げましたら、天皇陛下も皇太子殿下も非常に関心を持たれました。それは、大山の頂上に県がつくったトイレがあるのです。当然、下水があるわけではりませんので、それは自然エネルギーで運用しているトイレなのですが、どうしても汚泥がたまるのですね。その汚泥をどうやって運び出して、持っておりようかというのが問題になりました。ヘリコプターを飛ばして、頂上から持っておりたらいいのではないかと、皆さんそう思われるかもしれませんが、しかし、それをやろうとすると、そこにいる生態系に影響するということでありまして、それはできない。では、人の力で持っておりよう。では、人の力で持っておりるにしてもとってもではないが、手が足りない。では、ボランティアを募集しよう。皆さんも、えっと思われるかもしれませんが、最初にこの構想はみんなえっと思って聞いたと思うのです。しかし、ふたをあけてみたら450人集まったのです。大体、今2年目ですが、大体500人ぐらい集まるのです。子供たちもいます。子供たちが頂上では、えっ、こんな汚泥を持っておりると嫌な顔をしているのです。おりてきたころには、みんなさわやかな顔しているのですね。地球に対していいことしたな、山に対してよかったな。自分はきょう、こんなすばらしいことをしたという爽快感でむしろボランティアの方も出ていかれるのです。鳥取県内だけではありません。遠くからもそういう方がこられます。そういう時代に今、なりかけているということだと思います。

環境を守るために、とっとり共生の森というのもやっいまして、年末もマッサージ会社のファミリーさんと締結をしました。実に14社、16カ所の森があります。これは企業さんが、従業員の方も手伝う、またそれを管理するお金についても助成をしていくということで、ここをごらんいただきますと、コカ・コーラさんだとかサントリーさんだとか、皆さんの知っ

た名前の会社がたくさん並んでいると思います。そういうように、企業もこういうところに加わってくるようになりました。

今度は、共生の里というのをやろうとしていまして、田んぼや畑が荒れる。それに同じような形で企業の従業員の方が、畑仕事をしたり、それからその管理についてもお手伝いをいただくような、そんな仕組みを考えようと思っています。いよいよ実現する可能性も出てきていることであります。これがその共生の森の様子であります。

それから、これはちょっと難しい言葉であります、J-V E Rと書いてありますけれども、これは日本スタンダードでの環境評価を取り入れた森林の考え方です。すなわちCO<sub>2</sub>を吸収しよう。鳩山総理は、25%CO<sub>2</sub>を削減しようと言っています。このCO<sub>2</sub>を削減するためにいろんな取り組みが必要ですが、鳥取県では木を大事にすることでそれをやっていけないだろうかということでもあります。それを企業がCO<sub>2</sub>の削減量を買うわけです。それで流通をさせまして、森林の整備に充てていこうということでもあります。年末にこの資格を取りまして、年明けからきちんとした評価も受けて、いよいよそれを販売しようということになってきます。これは日本だけでなく、さっきのダイヤモンド・クイーンテットの地域でも共通の課題として、砂漠化防止だとかラムサール、渡り鳥の問題だとか、それから水産資源、黄砂の問題、そういうことをやるようになりました。

国連の方でも、気候変動首脳会合が開かれたわけでございます。それで我が国の責任などの話もされて、さらに先般はコペンハーゲンの方でCOP15が開かれたわけです。残念ながら、このCOP15では最終的な結論までは至らなかったわけです。京都議定書の後のことについては、来年といいますか、ことしですか、ちょっと不正確でありますけれども、COP16でさらに話し合うことになるわけです。

ただ、世界じゅうがこれをやっていかないといけない。日本でも不思議なことが起こって、鳥取かいわいでも今までとれなかった魚がとれるのです。例えばサワラという魚ありますよね、さかなへんに「春」と書く。あのサワラという魚は瀬戸内海の名産です。しかし、今は鳥取県の近海でとれるのです。やっぱり、気候温暖化の影響でないかと思えます。

こういうことを次に産業へと結びつけていったり、我々のライフスタイルへと結びつけていくべきではないか。とっとり発のグリーンニューディールに取りかかろうとしています。ここにございますように太陽光発電だとか、あるいはLEDの街路灯とか、こういういろんなことをやっていこうと。私もマニフェストで当選する前にこうした自然エネルギーの活用について6万5,000キロワットという発電目標量を立てました。これを今軽くクリアしています。それぐらい鳥取も、急速にこうした自然エネルギー志向だとか、環境産業志向へと移りつつあるところでもあります。

そのグリーンニューディールという新しい方針を立てて、今、予算化などもやりまして、突き進んでいるところでもあります。例えば、環境修復だとかリサイクルをやろう。ガラスがありますよね。ガラスも後は捨てるだけでなくそれを発泡させまして、玉砂利のようにして防犯対策に使おうと。家の周りに敷くわけです。そうすると、歩くとジャカジャカ

音がすると。それで泥棒がやってくればわかるという防犯対策用の砂利にしようとかですね。

さらに今、研究を進めていますのは、このたび地デジ化がされるわけでありまして、ブラウン管が急速になくなるわけです、旧式のテレビなど。あれを回収して有害物質を取り除いて、ガラスの再利用をしよう。これに鳥取県の研究所が参画をしてやっていこうではないかなということもやっています。新しい産業を起こそうとか、町づくりをやろうとか、新エネルギーを開発しようとか。

一つ新しいテーマで今、追っかけているのは電気自動車です。この電気自動車についても、いろんな方式があるわけでありましてけれども、今つくっている三菱のミープだとか、今度日産が出そうとしていますけれども、ああいうのはガソリン車に近いのです。つまり、ガソリン車はどうやって動いているかといいますと、エンジンで爆発を次々させるわけです。ガソリンを燃やして爆発をさせまして、そしてそのエネルギーで回していく。この回転運動だとか、トルクの運動というものを、それを回すのを車軸に伝えていく、車輪を動かしていくという問題だと。これはものすごいエネルギー効率が悪いのです。半分以下になるのです。そうでなくて、むしろもっと直截にタイヤのところにそのままモーターをつけて、要は電気自動車ですからモーターで動かしているわけでありまして、そこにモーターをつけて素直に動かしたらどうだろうかという研究をやっているグループがありまして、この開発チームの中に鳥取県も12月の議会で予算をつけまして、それで参画をすることになりました。県内でも10社以上が参画をし、県の産業振興機構も参画をし研究員を出すことになります。

左上と右上に珍しい車があります。エリーカという車がありますが、まだ見たことも聞いたこともないと思いますけれども、これは再考時速370キロで走るのです。電気のモーターを入れた車輪、タイヤが8つついているわけでありまして、ものすごく速く走る。しかも、一度充電をすれば300キロ走るといいます。今の電気自動車の悪いところは、100キロぐらいしか走り続けられないのです。ですから、ここから米子まで行ったら帰れないということですよね。それでは、ちょっと自動車として弱いところがありますので、このエリーカのような方式であれば300キロでありますから、今のガソリン車と同じぐらい長く走れることになるわけでありまして。

それから、とっとりバイオフロンティア事業。これは鳥取大学の医学部の研究で、押村先生がやっておられる研究であります。詳しくはそちらの方でもお聞きになることがあると思いますけれども、人の染色体の遺伝子というものをマウスの方に埋め込む。それで薬の効果を見る、薬効を見る。その研究であります。国の方で実は事業仕分けとかでひっかかってきたわけでありまして、我々、県としては全面的に応援しようということでございます。今月の29日に県の臨時議会を開こうと思っておりますが、そこにもこれの建設関係を計上させてもらおうと、今考えているところであります。

そのほかにも、この湖山のキャンパスからほど近いところに工学部の附属電子ディスプレイ研究センター、いわゆる液晶とかプラズマと言われるものであります。そういうものの専門の研究センターがあり、日本を代表するような先生方もおられるようになっております。



それから、ここから津ノ井の方に行ったあたりであります、日本セラミックという会社がありまして、そこがMEMSと言われますが、超微細工学の研究施設をつくられます。これも、鳥取大学と連携してやっていこう。こういうような先端技術開発、これは鳥取の得意分野として挑んでいくべき分野だろうと思います。

そうした環境分野とか先端分野だけでなく、いわばハイブリッドと言っていいと思いますが、従来のロートル産業と言われるような農商工をつなげていくことで、それで新しい産業を興していこうということでもあります。こらぼネットというのを東部、中部、西部でそれぞれ始めました。さまざまな農商工連携の例としてありますが、例えば右側の下の方は、黒にんにくというのがあります。これはニンニクを加工します。1日加工すると真っ黒になるのです。真っ黒になるとどんな味になると思いますか。甘くなるのです。不思議なものでして、そういう原料を使っていくということでもあります。それからベニズワイガニ。ベニズワイガニなどもズワイガニと比べると大分安いのですが、余り活用されていない。これを規格サイズにして、大衆的に売り出そうということでもあります。

観光ということも必要でありまして、自然だとか歴史を生かして観光誘客を図っていこうということでもあります。グリーンツーリズムだとか、ジオツアーと言われる、さっきのジオパークを生かしたツアーづくり。そうしたものが出てきています。

例えば、ニューツーリズムと言われるようなものに考えられた、若桜鉄道、若桜という駅があります。皆さんは行かれましたかね。まだ行ったことがなければ、ぜひ一度行っていただければと思いますが、列車に乗ってずっと終点が若桜という駅です。ここは汽車があるのです。C12の167号機というのがございまして、これが今でもあるのです。今、最近鉄道マニアがふえていまして、鉄ちゃんと言わせてもらいますが、その鉄ちゃんの一人、前原国土交通大臣がそうでありまして、この話をしたら非常に喜んでおられましたけれども、運転ができるのです。石炭ではないのですけれども、ピストンを動かすことで運転できるようになっていまして、そのような体験ツアー

[テープ中断]

北栄町というところでありまして、そこの御出身なのです。こうした皆さんと一緒になりました、町おこしをいろいろやっていこうと。あそこのあたりでは、コナン通りというのでできていまして、こういう銅像が建っています。世界じゅうの人が知っているのです、今。台湾からお客さんが来たときに、ショウワノートかなんかでつくっているコナンのノートがありまして、あれをお土産に配ったとき、100円やそこらの安いものでありましたが大変喜ばれて、クーナン、クーナンと言うのです。向こうではちょっと発音が違ってクーナンと言うらしいですが、そうして喜んでおられまして、そういう方々がこういう博物館といひますか、ふるさと館というのですが、そこらに行くと大変喜ばれる。

それでこの際、マンガサミットを誘致してはどうだろうかということでもあります。去年は年末に、この会長をされているのが漫画人であります里中満智子先生でありまして、お会いをしました。藤子不二雄先生とか、ちばてつや先生とか、あるいは永井豪先生とか、水木し

げる先生だとか、そうした方々に呼びかけをさせていただきました。私もそれで上京してきたのですが、何とか平成24年に国際マンガサミットを誘致してはどうだろうか。新しい視点で、やっぱりこれからの観光というのは、わかりやすく多くの人を引きつけるものがなければいけないと思いますので、こうしたことも展開してはどうかと思っています。海外にも、これは韓国の富川の映画祭、こういうところでやっぺいこう。

それから、食というものです。大切なテーマであります。鳥取県は食材の宝庫であります。皆さんも鳥取に住まれ始めて、びっくりされたことも多いと思います。おいしいものが結構安いのですよね。ですから、その素材でもおいしいぐらいのものがある。これは食博・大阪へ持っていったときのものでありますし、これはニューヨークに出展をしました。このニューヨークの総領事公邸での日本料理のパフォーマンスをやりました。それから、向こうのスーパーマーケットで鳥取県の特産品を売ったりしました。さらに上海にはナシを持ち込もうとか、例えばどら焼きです。今結構売れているのどら焼きです。米子に丸京製菓というどら焼き屋さんとか、和菓子屋さんがありまして、ここは結構こういうものを世界じゅうに売っているのですが、今、世界ナンバーワンなのです。どら焼きが何で売れるかという理由はわかりますか。それは中国とか韓国でも同じようなものがあるというのも1つありますけれども、もう一つはやっぱりドラえもんです。ドラえもんが一番好きな食べ物はどら焼きだとみんな知っていますから、何となく日本のどら焼きというのを買ってみたいということかもしれません。

それから、農産物は海外へも売れるのではないかと持っていきました。スイカも1玉6,000円から7,000円でロシアで売りました。売れましたね。びっくりしました。向こうで、中国産などの3倍というような値段で、日本から考えても高いのですけれども。ただ、なぜ売れたかという、後で聞きましたら、中国産のスイカで問題があったそうです。スイカの中に着色料で真っ赤になるのを注射して売っていたのがばれまして、ロシアで大変問題なったらしくて、そんなこともあって鳥取県のスイカが好評だったと。それから二十世紀ナシも、向こうにテスト輸出をさせていただきました。日本の約3倍の値段でありましたけれども、1,000玉近く売ったと思います。

食のみやこ鳥取県の一つのテーマはナシだと思いますが、二十世紀ナシだけではだめだと思います。例えば、下の方に真ん中にあります新甘泉、新しく甘い泉と書いた新甘泉だとか、それから鳥取大学の方で開発された秋栄とか、右側の方にありますけれども、こうした赤ナシ系統でもおいしいものがありますので、こういうものも含めてシリーズ化をしていってはどうだろうか。そうして鳥取と言えばナシだとイメージをブランド力につなげていってはどうだろうか。二十世紀ナシも、今までは8月の末に出荷するのが当たり前だったのですが、もうちょっとおくらそうという運動をしています。なぜかという、9月に入った方が甘くなってきておいしくなるのです。結局、市場の都合に振り回されるのではなくて、もっと消費者本位にナシの出荷も考えてはどうだろうか、こんな運動を今、やっているところであります。

それから、極実すいかと言われるスイカですね。これは、スイカの台木の上にスイカを接

いで育てるのです。普通はカボチャだとかユウガオだとかそういうものの台木といいますか、こういう木がありまして、そこに接ぎ木をしてスイカを立てるのです。鳥取県の試験場でも開発をした台木がありまして、それはスイカなのですが、その上につけることができます。この新しい台木、商品登録したのが、「どんなもん台」という名前でありまして、どんなものでもつけてやるとこういうものでございますが、そのほかねばりっこという長いも系でとっても粘りのあるもの。西条柿だとか、そういう品種があります。

魚もブランド化をしようと。ハタハタなども秋田が一番ではありますけれども、兵庫と鳥取県の境あたりの沖合が全国で一番とれるのです。順位をとってみますとハタハタの取れ高は、秋田、兵庫、鳥取なのです。だから、2位、3位の連合軍ですと、むしろこっちの方が多いのです。そういうものを、おいしいのでブランド化しようしました。秋田のハタハタと対決したのです、東京で。勝ちました、こちらの方がおいしかったです。そんなことをやったりしまして、ブランド化をしようと。

それから東京のアンテナショップをつくりました。イタリアン料理のレストランをやったり、それから鳥取県の野菜とか産直品を持ち込むようになりました。この食のみやこ鳥取県、若い人たちも加わりまして、この間はとっとりバーガーフェスタというのをやりました。日本初だと。ものすごい人になりまして、今度また第2弾を考えようかと言っています。

それから産業対策でありますけれども、I・J・Uターン、移住ターンと呼んでいますが、こういう移住者をふやしていこう。特に農林水産業が最近活発でありまして、ここにいますように357名、今年度出てきているということでもあります。これは鳥取が他地域に先駆けて、移住の受け入れのための助成制度だとか、研修制度を充実をしてきました。国の制度に肉づけをしていっています。それが評価されているのだと思います。この移住ターンの体制整備をさらに進めていこうということやってきています。最近、鳥取のこの東部の地域でありますと、青年会議所の皆さんがこの移住に関与して一緒になってやっていこうとか、だんだんと輪が広がってきています。

最近、やっぱり不況になってから急にこの移住のホームページのアクセス数がふえました。従来の3倍とか、そういうベースでアクセス数があるようになっていきます。ですから、今鳥取はしゅんになり始めたのかもしれない。

次に若いお父さん、お母さんの応援をするような子育て王国というのもやっていこうと。一つにはとっとり子育て応援パスポートというのをつくりました。これは平成19年にこしらえたのです。そして今では、このパスポート持っていますとほかの地域でも使えるようになり始めています。実はよその県と提携を始めたのです。隣の島根県、それから兵庫県、それから徳島県、奈良県、滋賀県、大阪府とか、この辺が一緒になって使えるようになって、どんどんエリアが今、広がりつつあります。これを持っていきますと、店の方で割引を受けられる。これは別に県がお金を出すわけではないのです。店のサービスでやってもらうのです。店にとっては、その割引を目当てにお客さんが来ると。だからウイン・ウインの関係なのです。こういう地域づくりの手法、子育て応援の手法を取り入れようとしたわけでありまして。

鳥取で特徴的なのは、環境でいいますと芝生化対策でありまして、ニール・スミスさんという人が湖山のキャンパスの近くで県有地を無償で借り受けて芝生化したのが始まりでありました。どんどんこの方式が広がっています。トルシエ監督さんとか、大阪の橋下知事とか、川淵サッカーチェアマンとか、こういう人たちが来られて、いたく感動されています。というのも、本当に芝生をつくるのと比べますと10分の1ぐらいの値段でできるのです。だから、こういうものを鳥取方式としてもっと広めていこうということで取り組み始めました。

また、倉吉では、未来ウォークというのを毎年始めていますけれども、そういうウォーキングを一つのコアとして健康づくりを進めようというのも特徴的な取り組みとして始めています。さらに、ストレッチ運動だとか、食生活のチェックカードをつくるとか、こういう健康づくりも鳥取のこれからのテーマではないかと思っています。

それから、教育のことですね。1つは学力テストの問題で結構鳥取県は騒がれました。皆さんも御記憶に新しいかと思います。私はこういう教育について、親御さんだとか地域、それから学校当局とか本人はもちろんでありますけれども、ある程度情報を共有しながら子供たちを伸ばす、才能を伸ばすことをやっていかなければいけないと思うのです。そのためには、情報公開は大切なツールになると思います。少なくとも、鳥取県の場合は情報公開を、要は県是のようにやってきたわけであります。

ただ、先ほど申し上げましたように片山さんの終わりごろから、ちょっと雲行きがおかしくなってきたおりました、情報公開から逆戻りする運用がなされ始めていて、私がそれにブレーキをかけにいったという状況がございました。基礎学力調査を前は鳥取県がやっていたのですが、これは情報公開をしていました。そうしたら国の方の学力テストが始まったのです。これを公開するの、どうするのということになりました。鳥取県の情報公開条例を素直に読めば公開しなければいけないのですが、それを一たん非公開ということに教育委員会が決めたもので騒動が始まったわけであります。

最終的には、情報公開条例を改正するという形で決着をさせました。これは、全国でもリーディングケースになりまして、注目を集めたわけであります。その際に、18条の2と書いてありますけれども、学力調査の情報公開で得た情報で、子供たちに悪い影響を与えないようにきちんと配慮をしてくれということを書いたわけであります。そうしたら、この条文について、あろうことかそういう条文をつくること自体が問題だみたいな、そういう論調もあったわけでありますけれども、ふたをあけて、これを今施行しておりますけれども、全く問題ありません。むしろ、やはりこの条例の趣旨に沿って、報道機関なども自制をして、実際のどの程度の情報を報道に供していくかというのを判断されるようになってきております。

だから、鳥取の一つのテストケースから新しい情報公開についての調整モデルが生まれたという状況になってきております。

さらに、人材育成のプロジェクトということで1億円の別枠予算をつくりました。それで小・中学校、高校に対しまして特別な予算枠をつくりました。これを、もっともっと伸ばしていこうと思っています。来年になりますと、新年度ですね、学力調査が早速4月に行われますが、

政府の方針で抽出調査になることになりました。しかし、子供たちのそれぞれの学力情報が本人にも学校にもわからないことになりますので、私は県費で補てんをさせていただきまして、全部の子供たちが参加できるようにしたらどうかと考えております。

このほかにも、産業人材の育成とか、若者のための職業あっせんや研修システムなど、その辺にも力を入れてきております。鳥取の教育の理念、ここに書いてございますけれども、例えばコンピュータなど、そうしたIT化も進んできております。教育予算の割合も全国的に見て非常に珍しいのですけれども、種目別でトップになってきているということでもあります。

大切なのは、これからは全員参加で地域づくりをやっていくことだと思います。先ほど申し上げたボランティア活動の行動者率でございます。鳥取力創造に向けた取り組みということになりますけれども、要は産学官連携とか言います。それから、企業さんだとか、学者さん、いろんな人が同じ地域に住んでいるのです。これを生かすことができれば、すなわち何か物づくりをしようとしたとき、みんなが協力し合っていくとか、町づくりをしようと思ったら、私はこんなアイデアがある、私はこういう技能があるという、みんなが集まってきてやっていく方がいいだろう。これができるか、できないかで、大都市地域と違った魅力を鳥取から出していくことができるのではないか。それを鳥取力だというように、私は考えています。それを伸ばしていくための取り組みを、ことし始めてきているところであります。一つ、象徴的な話としては、NPO法人学生人材バンクというのが鳥取大学の卒業生の手で運用されています。田中玄洋さんという方が代表理事をされていますけれども、地域づくり、農村の方に入って事業をやったり、先般は日本のまつりでボランティアセンターを運用してもらいました。

このようにして、ぜひ皆さんもいろんなチャンスがあると思います。これからは、みんなで町づくりをする、地域づくりをするということがないといけない。欧米はそうなのです。お上に任せるということでなくて、お任せとか、お仕着せでなくて、お上から押しつけられる、お仕着せでなく、お上に全部任せてしまうお任せでもない。そういう本当の意味の地方自治というものを、鳥取でぜひ体験をしていただきたいと思うし、そういうところに参画をしていただければありがたいと思います。

ことしは強小弐年だと、ガイナーレさんがきのう記者会見をやっておられました。強いような弱いようなよくわからないチームでありますけれども、ことしこそはぜひ上に上がっていただきたいと、私も全力で応援をしたいと考えております。強小というのは、要は小さくても強いということですよ。人口が59万1,000人だから、弱いということはないだろうと私は思います。むしろ、その中できらりと光るものを持った人たちがお互いに協力し合っていけば、私は道は開かれ得るのではないかと思うわけであります。

文豪のゲーテは、こういうように述懐をしているわけであります。1828年に語るところによれば、このドイツでは100を超える図書館がある。20を超える大学がある。70を超える劇場がある。このように文化的な豊かさ、本当の豊かさができてきたのは、分

権が進んでいるからだと言うのです。ゲーテ自身も、小さなワイマール公国というところの宰相を務めていたのです。ですから、そういう分権ということから開いていく未来というのがあるのではないか。その文豪のゲーテが息を引き取る直前、1832年3月2日の日付でありますけれども、市民の義務という言葉を残しているのです。めいめい自分の家の前を掃け。そうすれば、町は清潔だ。めいめい自分の課題を果たせ。そうすれば、市会は無事だ。そういうように説いています。これを命と引きかえにこのように残しながら旅立っていった文豪の姿がありました。

ぜひとも皆さん、この鳥取で生活をされ、まなびやをともにされていることを御縁として、ますます地域に参加していただきたいと思いますし、これからの自分たちの未来を開く上でもこうして鳥取をサンプルで考えていただければありがたいと思います。

時間も迫っておりますが、若干時間を残しましたので、質問があればお受けをさせていただきます。